看護実践学会誌　Journal of Society of Nursing Practice, Vol.36, No.1, pp.68～70, 2024

実 践 報 告

わが病院看護自慢

看護作品作りを通して
看護の喜び再発見！

中西　容子

金沢市立病院

日　　時：2023年11月10日㈮　14：00～15：00
開催方法：Webによるオンライン開催（金沢市立病院より配信）
参 加 者：外部からも含め医療機関の看護師　18名
内　　容：１．開催状況
　　２．看護部みどり会の取り組みと看護作品展の経緯
　　３．看護作品作りまでのプロセス
　　４．意見交換
　　５．まとめ

１．開催状況

2023年11月10日㈮に、「看護作品作りを通して看護の喜び再発見！」をテーマにわが病院看護自慢を開催いたしました。金沢市立病院看護部における看護作品展のご紹介や看護作品作りに至るプロセスなど、これまでの取り組みと合わせてご紹介ご報告をさせていただきました。

毎年開催している看護作品展は、病院の１階ロビーで作品を展示していますが、コロナ禍となってからの２年間はロビーでの作品展示は行わず、ホームページ上に作品の紹介などを行いました。そして2023年度は、３年ぶりに１階ロビーで看護作品の展示開催を行うことができました。

今回のわが病院看護自慢は、開催方法をオンラインとし、看護作品作りとその取り組みについてご紹介する形とさせていただきました。

２．金沢市立病院看護部みどり会について

金沢市立病院（以下当院）は、金沢市南部に位置する地域連携型の急性期病院です。金沢市の自治体病院として、感染症・救急・災害・母子医療を担う306床の地域に根差した病院です。当院看護部には、みどり会という看護師の互助会組織があります。みどり会は看護師相互の親睦と福祉を図り、看護の向上発展を目指した看護部の組織です。みどり会では毎年、新人歓迎会やクリスマス会、送別会などの行事のほか看護作品展を開催しています。

中でも看護作品展は2006年から開催しており、今回で16回目を迎えました。看護作品展は、患者さんに最も近い看護師の目線で日ごろ看護したり家族や介護者が介護したりする中での“あったらいいな”の小さな疑問やアイディアを看護作品という形にして、各部署で手作りしたものを毎年展示するものです。病院の１階ロビーに看護作品を展示することで、多くの患者さんやご家族、介護スタッフや病院職員に見てご評価いただき、あわせてご意見やご感想もたくさんいただいています。

連絡先：中西　容子
金沢市立病院
〒921-8105 石川県金沢市平和町３丁目７番３号

これまでに看護のアイディア作品を集めた全国大会でグランプリを獲得した作品や、モノづくりを継続して取り組んでいることに対する表彰をいただいたこともありました。看護作品をご覧になったご家族や外来患者さんからは、“患者さんのためにすごく工夫されており、参考にしたい”や、“スタッフ間の対話が素晴らしい”等々、当院の看護作品作りの取り組みに対して温かいメッセージを数多くいただき、スタッフの更なるモチベーションアップにもつながっています。

3．看護作品作りまでのプロセス

まずは看護作品展に向けて、みどり会役員から作品展開催までのスケジュールが提示されます。そのスケジュールに沿って各部署のみどり会役員が中心となってどのような作品にするか、アイディアを出し合います。この話し合いが看護作品作りにとっては大変重要です。日ごろ看護する現場の中での気づきや困ったことを中心に、“あったらいいな”を形にしていくための検討が行われていきます。看護作品の骨子が決まると、次はどのような材料を使用するかの試作品作りとなります。試作を経て本作品を作成しつつ、今度は作品名を何にするかの話し合いが行われます。作品名にもこだわりがあるようで、各部署で様々なひと工夫が行われています。このようにして完成した看護作品は、作品紹介と合わせて病院の１階ロビーに展示されます。

当院では毎年「ホスピタルギャラリー」というイベントを開催しています。これは、“病院が美術館になる日”と題して、病院の１階ロビー全体を使って美術館のような展示空間を作り、地域の方や職員による美術作品を３日間だけ展示するイベントを行っています。看護部は、このイベントと重ならない期間に看護作品展を開催するように調整しています。

第16回看護作品展の中からいくつかの看護作品を紹介したいと思います。（写真①）

ホットしまっしまくら（内視鏡センター）

内視鏡検査を受ける患者さんの検査中の苦痛を少しでも和らげたいと思い作成された、検査体位を保持する抱き枕です。素材や肌触りにも工夫し、何よりも安心して検査が受けられるような体位保持を補助する形にこだわりました。

するっとイドウダー（５階西病棟）

患者さんが臥床したままストレッチャーからベッドへ移動する際に、背部に敷いてスルスルっとスライドさせる事で患者さんにも安全で看護師も腰に負担なく移動が可能となります。レインコート素材を材料に試作と試用を重ねて安価に完成させました。

写真①　第16回看護作品展：病院１階ロビーにて

患者の足まもる君（４階東病棟）

車いすへ患者さんを移乗する際に、車いすのフットレスト部分でスキンテアを起こした経験からフットレストカバーを考案しました。取り付けや取り外しが簡単で、皮膚にやさしく、また汚れもさっと拭き取れる材質にこだわって作成しました。

４．意見交換及びアンケート結果

わが病院看護自慢には、外部からも含め医療機関の看護師18名の方々に参加していただきました。看護作品作りに携わってきた当院スタッフからは、「自部署以外での作品作りまでの様子を見ることができた」や「来年度の作品作りのヒントになりそう」、などといった意見が聞かれました。アンケートの結果からは、看護作品作りの様子に全員が関心を持てたとの回答をいただき、参加者には当院の看護作品作りの内容を十分に伝えることができたのではないかと感じています。また、アンケートの中からいただいたご意見ご感想の一部をご紹介したいと思います。

「職員の和気あいあいとした雰囲気がよかった」「作成過程でのチームのコミュニケーションが素晴らしいと思った」「患者さん、利用者さんに寄り添って考える姿勢が素敵」「作品そのものも活動も参考になった」「続けられていることもすごいと思う」「患者さんの立場に立った、看護の思いが作品として現われており、温かい気持ちになった」「看護ってやっぱりいいなぁ、と初心に戻ることができた」など、本当にたくさんのご意見やご感想、温かい言葉をいただき、看護作品作りを続けてきたことで看護の喜びを再発見するとても良い機会をいただいたと思っています。

５．まとめ

今回は本学会企画において、当院が2006年より看護部みどり会で取り組んできた看護作品作りについて、これまでの取り組みの経緯も含めてわが病院看護自慢でご紹介させていただきました。とても自慢するようなことではありませんが、どの部署のスタッフも患者さんへの“あったらいいな”のアイディアを形にするまでのプロセスを通じて、患者さんに寄り添ったチーム活動が実践できていること、そのチーム活動そのものが看護する喜びとなっていることを私自身が再発見できました。

今後ますます医療DXは進んでいきますが、看護の原点を見失うことなく、やりがいを感じることのできる現場づくりに取り組んでいきたいと考えています。